第13回JINSHA情報共有会with C4RA 「責任ある研究評価を考えるシリーズ ～定量的評価指標の現在と未来に向けた課題とは～」を開催しました。

2022年3月16日（水）、第13回JINSHA情報共有会with C4RA 「責任ある研究評価を考えるシリーズ ～定量的評価指標の現在と未来に向けた課題とは～」を開催しました。このセッションは、学術研究支援室（KURA）の人文・社会科学系研究支援プログラムメンバーが、人社系URAネットワーク[*1]の13大学のURAと共同で開催したもので、100名を超える参加がありました。

2014年以降開催されてきた人文・社会科学系研究推進フォーラム及びJINSHA情報共有会では、フォーラム運営ネットワーク校が中心となり、人社系研究における研究評価の課題について継続的に議論を進めてきました。その中で取り上げた「責任ある研究評価」[*2]という概念は、人社系研究に限らずあらゆるステイクホルダーによる評価方法の見直しを求める包括的な概念として注目されています。JINSHA情報共有会では、この「責任ある研究評価」に焦点を当てたシリーズを組み、評価に関する継続的な議論の場を作ることを目指しています。

シリーズ2回目となる今回は、書誌情報など定量的評価指標（以下定量指標）の現在と未来に向けた課題がテーマです。ともすると人社系研究は数値化に馴染まないということで議論が止まってしまいがちですが、ここ数年、運営費交付金の配分など様々な場面で定量的評価指標による管理が進み、人社系研究においても、定量的評価は十分なリアリティを持つ課題となっています。そこで今回は、研究IRデータに詳しいURAを中心としたグループ、Code for Research Administration (C4RA)のメンバーの協力を得つつ、4名のスピーカーに登壇いただきました。チャタムハウスルールに基づくグループディスカッションを含めることで、C4RAの専門知とJINSHAの俯瞰力を組み合わせて定量指標についてとことん考える会となりました。

趣旨説明１

冒頭、趣旨説明１では、京都大学学術研究支援室URA佐々木が欧州で研究評価改革が加速している現状や、日本学術会議・科学者委員会研究評価分科会提言『学術の振興に寄与する研究評価を目指して～望ましい研究評価に向けた課題と展望～』が2021年11月に発出され、日本においても研究評価見直しの議論が注目を集めつつある状況を概観。一方、こうした研究評価見直しの流れとは反対に、URA業務の現場では、SciValやInCitesといった書誌情報ベースの研究力分析ツールがいっそう身近になり、機関や研究者の特徴や強みを把握する方法が、一部の身近な数値指標に依存する傾向にあるのではないか、という課題認識もあります。人社系研究を支援するURAが、こうした研究力分析ツールに詳しいURAの同僚と学び合いつつ、評価・指標へのリテラシーを上げることこそが、責任ある研究評価の実践につながる道なのではないか、と提起しました。

趣旨説明２「JINSHA情報共有会with C4RAで目指したいこと：新たな一歩」

続く趣旨説明２では、この学び合いが日常のURA業務とどのように関わるのか、東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室URA新澤裕子氏から説明がありました。新澤URAは、文理を問わず学内URAのハブとして業務を行っていることもあり、Code for Research Administration (C4RA)という、研究力分析（研究IR）関係者によるコミュニティに関わると同時に、人社系URAネットワークにも参加されています。たとえば、Top10%論文数という指標を使ってプレゼンを行うとき、指標の定義と限界を説明するものの、人文学などそもそも研究成果がデータベースに収録されにくい分野との比較には適さないといった詳細の説明まで行き着かないうちに数値のみが独り歩きしてしまうという現状をどうすればよいのか。まずは分析ツールの強みを理解しつつ、そこで捨象される多様な研究成果を理解し、多面的な分析・解釈をするため、URAなどのネットワークを活用して継続的に議論していくことが提案されました。

人社系研究評価をめぐる論点整理

人間文化研究機構国立歴史民俗博物館准教授後藤真氏からは、議論に先立ち、人社系研究評価をめぐる多様な論点の整理が提起されました。研究評価を行う目的を常に見失わないという大前提のもと、プロジェクトの進捗管理、機関間比較、あるいは機関内・分野内の強みのアピール、といったどのレベル、側面から行う評価なのか。それぞれに応じて、論文、書籍の量や媒体の多様性など、どういう指標、情報があれば目的を達成することができるのか、そのうちで足りない情報はなにか。これらを整理する際、さらに、現在必要なもの（As is）と、将来必要なもの（To be）を切り分けて議論することで、本来必要だけれども今はコスト的に不可能なものを明らかにしつつ、現実的に今できることを進めること。そしてその際にも最終目的につなげるように考えることで、本来の目的を見失わないことが重要という指摘は、ともすれば考えながら手を動かさなければいけないURAにとって非常に重要な示唆となりました。

InCitesなどを使った業績可視化業務で認識する課題

京都大学学術研究支援室URA岡﨑麻紀子氏からは、理工系地区担当URAとして、また企画・広報グループでIR担当URAとして、日常的に人社系URAとも相談しながら業務を進める立場から、話題提供がありました。研究IRとして、大学の経営・研究戦略、部局の研究戦略マネジメントに貢献することをミッションとしていますが、近年データ提供依頼を受ける報告書などにおいては、論文の質を測る指標実績値などの入力が求められる機会が増えているとのこと。そのため、研究IRで扱うデータも書誌情報に基づいた分析・評価が中心になっているといいます。しかし、その一方で、そうしたデータにはそもそも人社系研究の成果は一部しか掲載されておらず、さらに人社系以外でも社会、政策への貢献なども、こうしたデータから漏れ落ちてしまうため、論文指標で評価できるものは一部に過ぎないことを認識する必要が指摘されました。人社系に限らず、書誌情報データベースで不可視化されているものをどうやって評価・分析できるのか、そのためのツールづくりが求められていると言えます。

話題提供　「J-STAGEとCiNii Booksを活用した人文社会系の研究活動の可視化－実践と課題－」

2つ目の話題提供は、横浜国立大学 研究推進機構 特任教員（講師）/ URAの久保琢也氏からで、具体的に人社系の研究活動を可視化する実践と、やってみた課題につい

てお話しいただきました。人社系研究の評価・可視化に関する課題を指摘するだけでなく、人社系研究の成果として特徴的な日本語による論文と書籍に着目し、実際にこのツールづくりを試行した結果見えてきた課題があるとのことでした。

まず、日本語論文については、J-STAGEの協力を得てメタデータを取得し分析したところ、Web of Scienceのシェアと比較してJ-STAGEのシェアの方が優位な大学も多く、一つのデータベースのみで見ていては見過ごされがちな研究の側面が明らかになったとのこと。

また、書籍に関しては、CiNii Booksを用い大学図書館における専門書の所蔵状況を評価指標として試行的に調査したところ、分野や出版年によるばらつき、学術書の特定の困難さなど課題はありつつも、分野別の所蔵館数が可視化され、指標としての可能性が感じられる結果だったとのことです。インフラが整わない限り実用化は遠いようですが、既存のリソースを活用することで、これまでデータとして見えていなかった研究活動が可視化されたことは確かです。誰かがデータベースを整えてくれることを期待しつつも、既存のデータで何が使えそうか、どういう情報があれば人社系の多様な研究活動がより多く多様に可視化されうるのか、議論や行動の第一歩を踏み出す際の参考になるお話でした。

ディスカッション

続き、8つのグループに分かれ議論ののち、全体で意見交換しました。今回は、所属や立場を超えて自由な議論ができるよう、チャタムハウスルールを適用しました。会議中の発表、ディスカッションで得られた情報は利用可ですが、その情報の発言者やその他の参加者の身元および所属を明示的にも黙示的にも明らかにしないという条件だったため、以下も発言者を明記しない形で記載します。

まずはスピーカーのお話からの気付きとして、

- 人社とIR系の人と一緒に話をしてみると、実はそんなに遠くはなく、持っている課題は近いのではないか
- 指標をつくると、どうしてもその指標に寄った研究をしようという研究者がい

たり、あるいは指標にすごく執着するような形の取り組み、そこだけを追求するようなことになってしまったりというのがある

- （指標を見て）中央値がここで、それに及ばないからだめだという議論が始まらないよう留意する必要がある
- どういう項目が分析のために必要か、ということについては、おそらく我々のような人間が話をして情報を集めていくことが有効になっていくかもしれない

人社系研究支援の立場からは、

- JINSHAとC4RAのコラボというところからスタートしつつ、後藤さんがおっしゃっていた、なぜ評価するのかというところは軸に置きたい
- 理系に関してはいろいろ評価の仕組みが定量的なものも含め50年以上前からうまく作られてきた歴史がある中で、人社系はそれを作りこんでいない
- 指標による評価が進む中で疎外感を感じているのは人社系の研究者みんな同じなので、人社系（特に若手）がやる気が出るような指標をみんなで考えていく必要がある。こうした会の中でネットワークをつくり、そういう盛り上がりをつくっていく必要がある
- 評価、評価と言われるとつらいけれども、評価されないと全体のネットワークの中で見えてこないという焦燥感が当然あり、うまいこと評価軸があることで、逆に面白いことができるかもしれない

IR業務に関する課題としては、

- データベース以外のところを見ていないのではないか
- 現状は機械的に抽出できる範囲での分析になりがちだが、そこから分野をどうやって抽出していくのか
- IRは本当に地道な作業で、本当にいろいろなエフォートがかかるもの
- 人社系でも理工系でも共通の課題として、分野がざっくりしすぎていて、集計している数値にどんな意味があるのか、その妥当性などにも課題がある
- データの網羅性、正確性に関して、全てを網羅するデータは絶対にないという

前提を共有しておくべきではないだろうか

- 各大学で実際にどんな感じの統計学的な分析をしているのか、みんなで共有できたらいいのではないか
- 単純に数字だけという話ではなく、IRをやる上では分野ごとの特徴であるとか研究者をあらかじめ知っておくことが必要だし、そのためにURA同士がコミュニケションを取ることが非常に大事

研究者との関係については、

- URAとしては人社系の研究者と一緒に、どういう評価でやるべきかというようなことをしっかりと話し込むことが重要
- 研究者の中には評価指標に関する理解が十分でない人も多いため、URAの中でしっかりとレベルを上げ、理解した上で研究者と付き合うことが大事

その他、個別の業績把握については、人社系研究特有の、書籍の分担執筆章、紀要の扱い、学会発表論稿のカウントの仕方、オープンアクセスや、デジタル・ヒューマニティーズなどを奨励し積極的に評価する方法、若手の独創性や、インパクトをどう見せていくのか、分野を超えた評価の方法、といった論点が出されました。

最後のディスカッションでは、研究評価は当然のことながらそれだけが独立してあるのではなく、研究の進め方や作法の多様性と密接に結びついているため、指標を考えるときはかならずその作法を意識することが必要であること、また、データが十分にないというときに、今あるものでどこまでがわかっていてどこが足りないのかという整理が重要で、足りない部分を明らかにしつつ、でも取れるデータからはこういうことはわかる、という統計データの偏りのようなものまで含めて説明したうえで研究評価をすることが重要で、むしろそれこそが責任ある研究評価ということだと思う、という話がありました。

今後、JINSHA情報共有会では、この責任ある研究評価についての議論を継続していく予定です。KURAの人文・社会科学系研究支援プログラムは、JINSHAネットワークと共同でこのセッションの内容を関係機関と共有し、研究の発展につながる評価につなげる努力を続けていきます。

（文責：学術研究支援室　佐々木）

*1　人社系研究支援に従事する複数大学の URAの 連携により 2014 年度から実施している人文・社会科学系研究推進 フォーラムの運営母体。関連企画として、2017 年度から中規模程度の情報共有会を不定期開催。現在のメンバー校は、以下13校（大阪大学、京都大学、筑波大学、早稲田大学、琉球大学、北海道大学、横浜国立大学、中央大学、広島大学、東京大学、東北大学、新潟大学、神戸大学）。

*2　Stephen Curry et. al. (2020)によると「多様で包摂的な研究文化のもとで、複数の異なる特性を有する質の高い研究を促し、把握し、報奨するような評価のアプローチを指す包括的用語」と定義される。訳文は、林隆之, 佐々木結（2021）による。

京都大学学術研究支援室　〒606-8501京都市左京区吉田本町 TEL：075-753-5108　FAX：075-753-5110　E-MAIL: contact@kura.kyoto-u.ac.jp